宮崎大学教育文化学部紀要　人文科学　第18号（2008）43－51頁

宮崎語話者と東京語話者のイメージ（1）

－宮崎県都城市の調査から－

早野　慎吾

The image of Miyazaki Dialect Speakers and Tokyou Dialect Speakers
－From the Research of Miyazaki Prefecture Miyakonojo City－

Shingo HAYANO

１．はじめに

地域語話者には、パーソナリティや職種に関するステレオタイプのイメージが付随している。北関東において、北関東の地域語話者は考え方が古く、丁寧さに欠けるが、素朴でおおらかなパーソナリティの持ち主で、東京語話者は都会的で考え方は新しいが、おおらかさに欠けるパーソナリティの持ち主であるというステレオタイプのイメージが存在していた（早野 1993・1996）。また茨城県水戸市で行われた調査では、茨城語話者は活動的で親切であるが、楽観的で冷静さや丁寧さに欠けており、さらに貧乏で知性が無く容姿も悪い頑固者であり、東京語話者は丁寧で控えめ、冷静で慎重、また社交的な性格で知性的、さらに容姿端麗で金持ちであるという、より詳細なイメージの存在が明らかとなった（早野 2002）。茨城語を使用するか東京語を使用するかで、話し手の性格や知性だけでなく、外見や金銭的な収入まで評価されているのである。

早野（2005）では、話者のパーソナリティ特性がEysenc（1964）における「外向的－内向的」「情緒安定－情緒不安定（神経症傾向）」の二つの因子で特徴づけられることを分析した。また、それらの特性は職業イメージと密接な関係がある。茨城語話者によくあてはまるのは農家・漁師・大工・土木作業員などの伝統的な職種であり、昔ながらの性質を頑固に保持しているというイメージがある。東京語話者によくあてはまるのは医師・弁護士・デパート店員・レストラン店員など、知性と社交性を必要とする職種である。

以上の調査結果は北関東（茨城県・栃木県）に関するものであるが、話者イメージにも地域差が大きいのではないかと考えられる。本稿では、宮崎県都城市で行った実地調査をもとに、都城が属する諸県方言域における地域語話者イメージと東京語話者イメージの実態を明らかにする。さらに、茨城調査の結果（早野2005）と比較することによって、話者イメージにどの程度の地域差がでるかを分析する。

２．調査概要

実地調査は都城市（旧都城市全域）(注1) において、2005年６月から８月にかけて行った。都城市を11の地域に区画し、各地域からなるべく均等に10代～60代の各世代、男女１名ずつ選定するように心がけたが、地域的に調査できなかった世代および性もある。人数としては10代26名・20代22名・30代21名・40代24名・50代25名・60代19名の計137名（男性78名・女性59名）である。

調査方法はアンケート形式で、各項目についてあてはまるかあてはまらないかを話者自身に記入してもらった。項目には「気まぐれ」「穏やか」等のパーソナリティ特性、「文化的」「知的」等の知性・教養特性、「容姿端麗」「派手」等の外見特性、「金持ち」「貧乏」等の経済特性、さらに「漁師」「サラリーマン」等の職種に関するものなどが含まれている。今回は、早野（2005）で用いた41項目に「かわいい」「かっこいい」という外見特性の２項目を追加した。

宮崎県方言は豊日方言に属する日向方言と薩摩方言に属する諸県方言とに大きく区画することができる（東条 1954）。調査地域である宮崎県都城市は諸県方言域の中心地である。

３．特性分析

３．１．パーソナリティ特性

パーソナリティに関する12特性は、「外向的－内向的」「情緒安定－情緒不安定（神経症傾向）」の二つの因子で特徴づけられるもので、図１のようにまとめられるものである (注2)。図２は、地域語話者イメージに関する調査結果である。都城語話者に関するデータは、今回の都城調査で都城のことば（地域語）をよく使用する話者イメージに「あてはまる」と回答した話者の比率であり、茨城語話者に関するデータは、茨城調査（早野 2005）の調査結果で、茨城のことば（地域語）をよく使用する話者イメージに「あてはまる」と回答した話者の比率である。図３は都城調査と茨城調査において、東京のことば（東京語）をよく使用する話者イメージに「あてはまる」と回答した話者の比率をそれぞれ表したものである。

茨城語話者のイメージは、情緒安定・不安定にかかわらず外向特性に大きく傾いているが、都城語話者のイメージは外向－情緒安定特性に大きく傾いている（図２）。外向－情緒安定特性である「楽天的」「のんき」はよくあてはまるが、外向－情緒不安定特性の「気まぐれ」「積極的」は、中間的な値である。さらに、内向－情緒安定特性の「穏やか」がよくあてはまる。都城語話者には、冷静さや控えめさに欠けるが、穏やかでのんきな性格であるという、非常に明確なイメージが存在していることがわかる。外向－情緒安定特性と対称的な内向－情緒不安定特性の「頑固」があてはまっているが、これは茨城語話者イメージと共通している。

都城調査において、75％以上が「あてはまる」と回答したパーソナリテイ特性が東京語話者イメージにはないが、全体的なパターンは茨城調査の結果と近い（図３）。茨城、都城ともに、東京語話者には社交的な外向－情緒安定型のパーソナリティというイメージが存在していることがわかる。特性イメージに対する強弱はあれ、東京からの距離が大幅に異なる茨城県と宮崎県（都城市）で、近いパターンが観察できたということは、東京語話者は全国的に同じようなステレオタイプのイメージが存在している可能性がある。

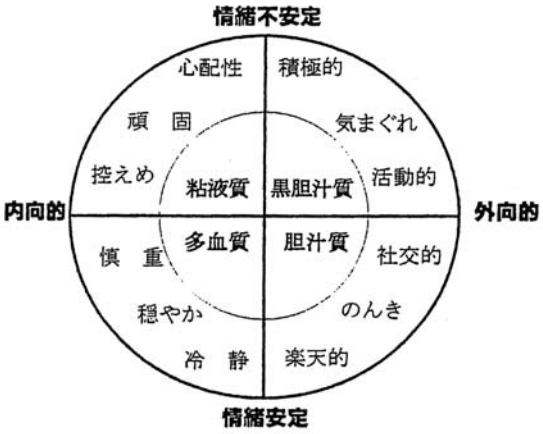

図１　パーソナリティ特性(早野 2005 p. 91)

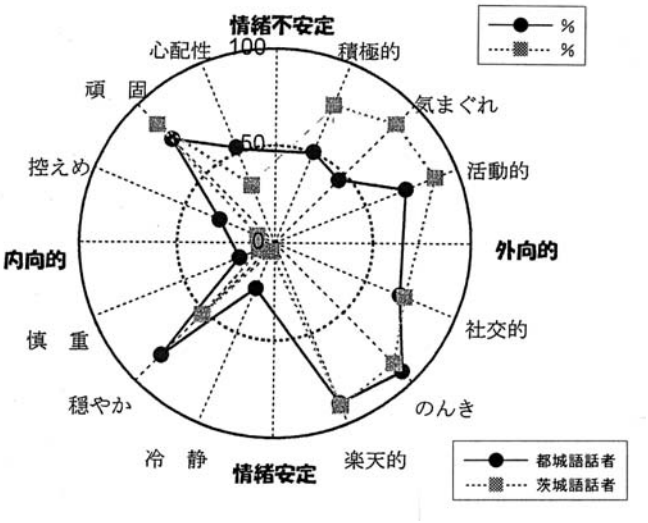

図２　地域語話者イメージ(パーソナリティ)

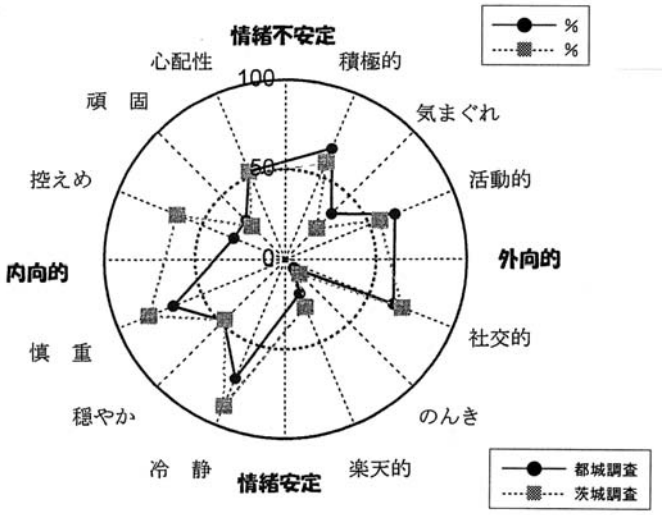

図３　東京語話者イメージ(パーソナリティ)

３．２．対人対応特性

図４は地域語話者イメージ、図５は東京語話者イメージに関する「対人対応」「知性・教養」「外見」「経済要素」特性に関する結果を表している。

茨城語話者には「親切」「ぞんざい」がよくあてはまり、「丁寧」がほとんどあてはまらない。都城語話者には「親切」がよくあてはまり、「不親切」がほとんどあてはまらない。また、都城語話者では「丁寧」「ぞんざい」は中間的な値である。都城では、方言を使っても、あまりぞんざいとは思われないようである。

都城調査において、東京語話者には「丁寧」がややあてはまり、「親切」はあてはまらない。ただし、「親切」ではないが、「不親切」とも思われていないようである。茨城調査では「丁寧」がよくあてはまり、「親切」はどちらでもなかった。茨城と比較して都城では、東京語話者に対してはプラス特性が弱くなり、マイナス特性が強調されている。逆に地域語話者に対しては、プラス特性が強調され、マイナス特性が弱まっている。都城は茨城よりも、地域語話者に対するイメージが良く、東京語話者に対するイメージが悪いことがわかる。茨城調査と最も大きな違いが観察できたのが、この対人対応特性である。

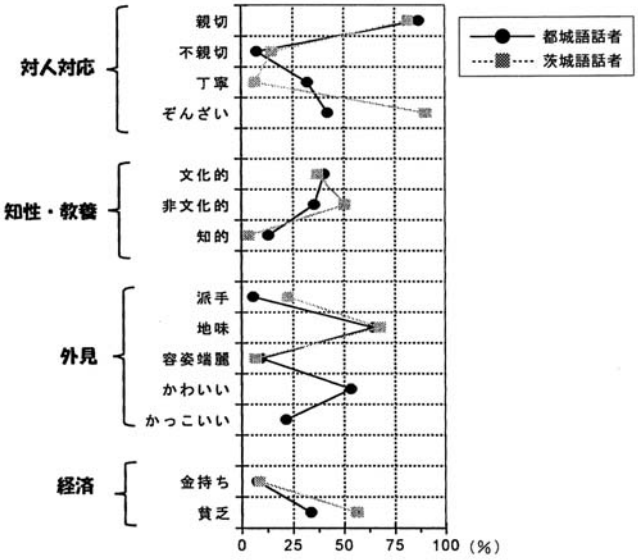

図４　地域語話者イメージ

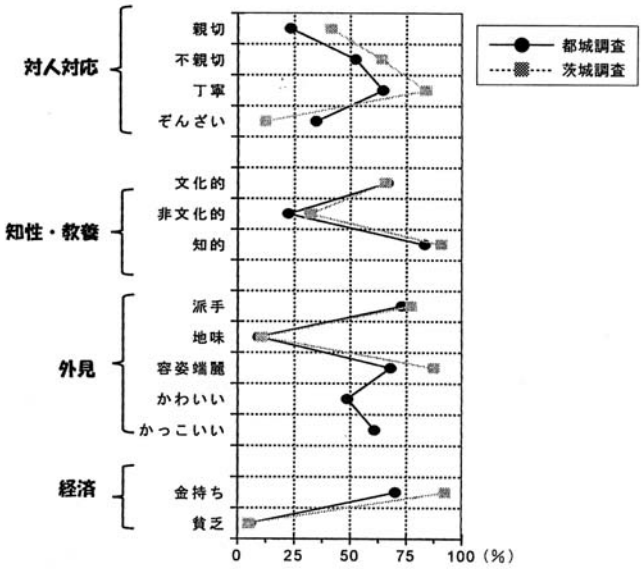

図５　東京語話者イメージ

３．３．知性・教養特性

栃木県南部での意識調査では、権威や規範性、さらに革新性など知性や教養と関係する項目のほとんどが東京(中央)と結びついていた(早野 1996)。今回の都城調査で、東京語話者イメージの特徴が顕著に現れたのが、この知性・教養特性である。東京語話者には、「知的」「文化的」がよくあてはまる。つまり、東京語話者に対する最も明確なイメージが「知的」「文化的」ということがいえる。逆に、都城語話者には、「知的」「文化的」はあてはまらない。これは茨城調査とほぼ同じである。この結果については、東京語が体系的に標準語に近いことや使用される場面なども関係していると思われるが、都城の話者が知性や教養の基準を東京に置いていることや、東京語が知的な職種と結びついていることなどが東京語話者を「知的」と判断していることの大きな要因になっていると考えられる。逆に都城語話者を「知的」と判断する話者がほとんどいないのも、そのことが要因であると考えられる。

３．４．外見・経済的要素特性

茨城にくらべて、やや弱いが、都城においても、外見特性や経済特性が話者イメージと密接に関係している。今回は、外見特性の「かわいい」「かっこいい」を追加して調査した。

茨城調査と同様に、イメージの上では、外見と使用言語とが大きく結びついていることがわかる。都城語話者・茨城語話者ともに、「地味」であり、「容姿端麗」ではないと考えられている。水戸調査(早野2002)から、この「容姿端麗」は都会的な洗練さと結びついていることがわかる。都城語話者は「容姿端麗」ではないようであるが、「かわいい」と評価した話者が53.3%いる。都会的な洗練さに欠けるが、外見的に大きなマイナスイメージはないことがわかる。

外見ばかりでなく、経済面においても明確なイメージがある。茨城語話者・都城語話者ともに、「金持ち」ではないと思われているが、「貧乏」とも思われていない。それに対して、東京語話者は明確に「金持ち」と思われている。これらの外見や経済的なイメージは次の職種イメージと深く結びついている。

４．職種イメージ

図７は地域語話者、図８は東京語話者に関する職種イメージの調査結果である。パーソナリティ特性や対人対応特性などと比べて、茨城と都城の違いが小さく、ほぼ同じパターンとなっている。茨城、都城ともに職業に関しては、非常に明確で同じようなステレオタイプのイメージが存在している。

地域語話者によくあてはまるのは「農家」「大工」「土木作業員」などブルーカラーの職種(注3)である。ホワイトカラーの職種で、特に知的専門性の強い「医師」「弁護士」やサービス業でもステータスの高い「デパート店員」「レストラン店員」にはほとんどあてはまらない。逆に東京語話者にあてはまらないのがブルーカラーの職種で、あてはまるのがホワイトカラーの職種である。特に「医師」「弁護士」「デパート店員」「レストラン店員」などはよくあてはまる。東京語の使用が「知性」や「ステータス」と大きく結びついていることが理解できる。既に述べた話者イメージは、この職種イメージと大きく関係している。東京語話者にあてはまっていた外向特性の「社交的」「活動的」なども、ビジネスとしての特性と理解できる。ビジネスマンであれば常に身なりを気にしているというイメージから外見特性がプラスになり、経済特性に関しても、ステータスの高い職種について高収入を得ているというイメージから金持ち

と思われているものと考えられる。

「医師」「レストラン店員」などの東京語使用が期待される職種を東京語使用職種、「農家」「大工」などの地域語使用が期待される職種を地域語使用職種と表現することができる。「タクシー運転手」や「スーパー店員」などは、どちらの使用も期待される中間的な職種である(早野 2005)。

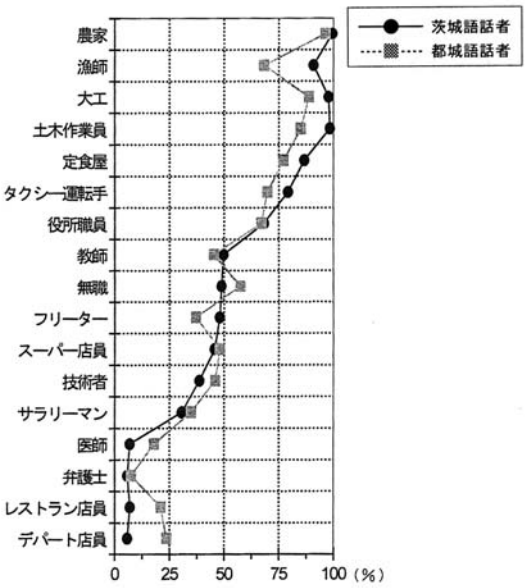

図７　職種イメージ(地域語話者)

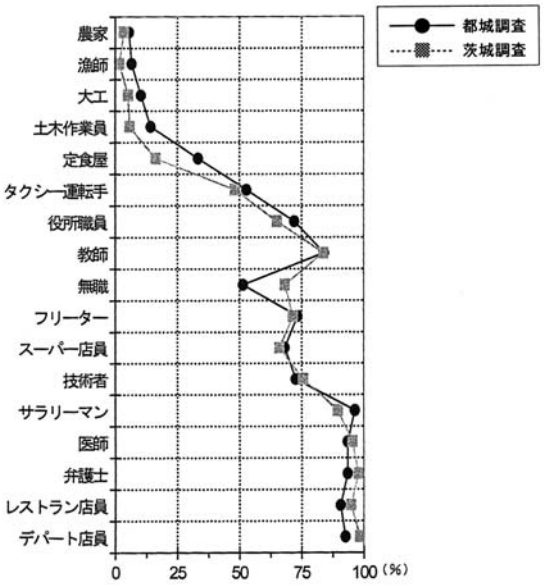

図８　職種イメージ(東京語話者)

5．総合的イメージ

茨城、都城ともに地域語話者に関しては「農家」「漁師」「大工」などの昔ながらの伝統的地域性を保持する肉体労働者というイメージが支配している。外向型というのは、活動的な人物に対するステレオタイプのイメージである。地域語話者の外向特性「社交的」「活動的」は仕事だけでなく「遊び」に関するイメージが多分に含まれている。都城調査で、地域語話者のイメージとして「いつも遊んでいる」という回答が多く聞かれた。また外向型に偏りながらも内向特性の「頑固」が強調されている。伝統性と「頑固」は密接な関係があるものと考えられる。

それに対して東京語話者はステータスの高い知的労働者というイメージが支配している。内向型というのは知性、教養のある人物に対するステレオタイプのイメージである。外向特性の「社交的」「活動的」などが強調されていたのは、ビジネスライクな社交性と解釈できる。東京語話者は打算的な人物と考えられているようである。

都城語話者は、のんきで活動的、知性やお金はあまりないが、穏やかで親切な人物と考えられている。それに対して東京語話者は、慎重で社交的(ビジネスライク)、親切心に欠けるが、容姿端麗で金持ちの知的な人物と考えられている。地域語話者はいわゆる内面の良さが強調さ

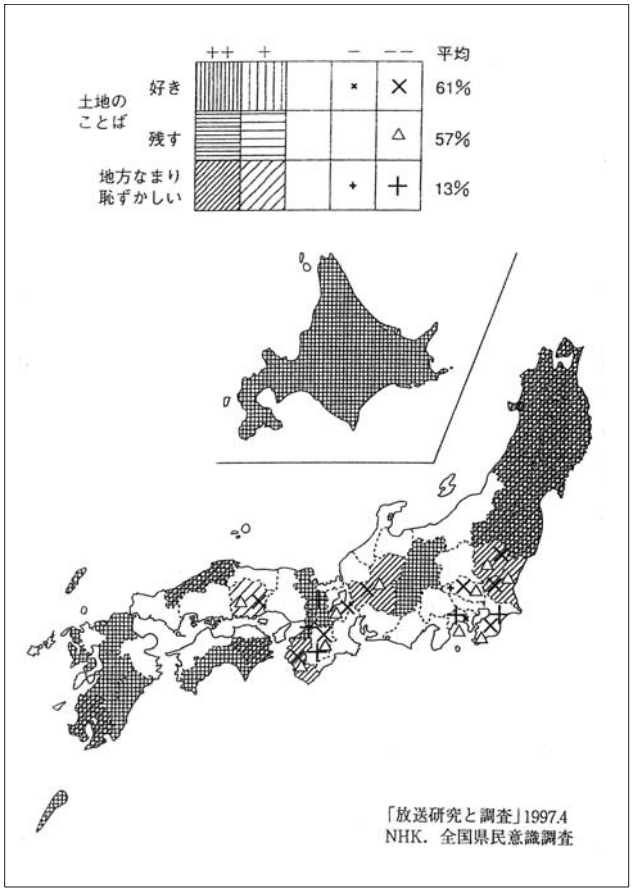

図９　方言イメージの日本地図（井上 2007 p. 29）

れ、東京語話者は知性と外見の良さが強調されている。茨城調査と都城調査の結果のパターンは似ているが強弱の差が観察できた。都城では茨城と比較して、地域語話者に対しては良さが強調され、東京語話者に対しては悪さが強調されていた。これは図９の、方言イメージの調査結果と一致する。茨城では土地のことばを「恥ずかしい」と感じているのに、宮崎では「好き」「残したい」と感じている。

６．おわりに

現代社会において地域語と東京語は場面差だけでなく話者のパーソナリティによって使い分けられている部分が多い。北関東(無アクセント域)において、東京の流行性に価値観をもっている話者は東京式アクセントを獲得し、そうでない話者は東京式アクセントを獲得していない傾向が強かった(早野 1996)。これは、東京式アクセントが東京・流行志向と結びつき、その志向性(価値観)を表現するために、東京式アクセントを使用していると考えられる。つまり、言語スタイルのファッション化である。地域社会では話者が自ら表現したいと考えている志向性と結びついた言語スタイルが使用されている。

基本的なスタイルがファッションのように使われるのに対し、個別な方言形がアクセサリーとして使用されている例も報告されている(小林 2004)。方言のアクセサリー化である。言語スタイルと要素を個性によって使い分けられる時代になったのである。

【注】

１）現在の都城市は2006年１月旧都城市に、山之口町・高崎町・高城町・山田町が合併してできた。調査地は、旧都城市である。

２）基本的な分類はEysenck(1964)による。粘液質･多血質･黒胆汁質･胆汁質とは古代ギリシアの気質分類を表している。Eysenck(1964)では４区分に各８特性(4×8の全32特性)を提示しているが、32特性に関する調査(話者自身のパーソナリティに関するもの)を茨城県で行い数量化理論第Ⅲ類にかけたところ、反応パターンが非常に近い特性が多かったので12特性で代表させた(早野2005)。今回は、茨城調査と比較するために、同一の項目を用いた。

３)「農家」は厳密には職業人そのものを表す語ではないが、一般には「農業に従事する人物」として使われることが多い。

【参考文献】

井上史雄(2007)『変わる方言 動く標準語』筑摩新書
NHK放送文化研究所編(1997)『現代の県民気質－全国県民意識調査－』日本放送協会
小林隆(2004)「アクセサリーとしての現代方言」『社会言語科学』7-1 社会言語科学会
東条操(1954)「序説」『日本方言学』吉川弘文堂
早野慎吾(1993)「個人の言語使用とパーソナリティ」『Ars Linguistica』Vol. 1 中部言語学会
早野慎吾(1996)『首都圏の言語生態』おうふう
早野慎吾(2002)「東京語話者と茨城語話者のイメージ－水戸市の調査から－」『名古屋・方言研究会報』Vol. 19 名古屋・方言研究会
早野慎吾(2005)「方言コンプレックスのメカニズム」『Ars Linguistica』Vol. 12 中部言語学会
Eysenck, H, J (1964) Crime and Persomality. London. Routledge and Kegan Paul.